

46. ロータリーとは何か

1981-1-15

1980年11月30日出版のジェームス・P・ウォルシュ著、是恒正訳「ポール・ハリス—偉大なる奉仕の先覚者」(3～4頁)には次のように書いてある：

「ロータリーとは何か」「ロータリアンとは何か」がいつも問われるが、これは簡単に答えられる問題ではない。

ロータリーは理解しやすいと同時に定義しがたいからである。

ロータリーとは対立する政治哲学、信条の違い、高度な科学技術及び文化的価値の違いが唱える「否定」を潔しとせず、これを超越することによって、長きにわたって国際理解を防げてきた障壁のすべてを乗り越える生き方である。

ロータリーはこういうものと対決するのではなく、これらがもつ価値を止揚する。

ロータリーは人間性を高める生き方である。人は、他者への奉仕を通してこそ完全な満足を見いだすからである。

ハリスはロータリーを一身に具現したものの、それ自体であった。

自分自身を快く、心をこめて他者に与えた。善良な人々の善意を組織化し、それぞれのロータリー・クラブが奉仕

する地域社会の生活にその善意を注いだ。

結束して人道主義の理想を広めるよう、人々に要求することによって、その人々の人生を豊かにした。

人々を結びつけ、共通の善と人類の進歩とを目指す有力な社会勢力にまとめあげたのである。

こういったものが、ロータリーの基本的構成要素であるが、その価値を完全に評価するには、経験してみなければならぬ。

ロータリーは、楽しさも多かわりに、必然的につらい仕事でもある。

1919年、アメリカの新聞『ヒューストン・クロニクル』はハリスとロータリー運動を評してこう述べた。

「彼が組織したのは奇妙な団体で、会員はその団体から何も得ないどころか、善を行なうという特権を手にするために会費を払うのである」と。

これはロータリーの哲学を簡潔に表現している。ただし、ロータリー・クラブ会員たるにふさわしい者は、ロータリーから得るものは皆無であるとは言わないであろう。

ロータリーで最もすばらしいものを一つだけあげよう求められれば、多分、一言、「親睦」と答えるであろう。

昭和52年9月私は時のR. I. 第273地区西田武雄ガバナーから「ロータリーとは何でしょうか」との質問を受けた。その時私は下記の通り回答した。(西田ガバナー月信No5)

『1977年5月～6月R. I. 理事会は、国際ロータリーの各出版物その他での使用のため、ロータリーを簡潔に説明するものとして次の声明文を採択しました。

「ロータリーとは、人道的な奉仕を行ない、全職業界における道徳的水準の高揚を奨励し、全世界に善意と平和を築くために、国際的に結ばれた職業人の団体である」
「国際ロータリー文献東京事務所公式訳文」は次のようになっております。(ロータリーの友：VOL. 25 No 7 P 5)

『ロータリーとは

他人に対する思いやりと、他人のためにつくすことである。

ロータリアンは、地域社会をより良くする努力を通じて他人のため

に奉仕し、ビジネスと専門職業生活における道徳的水準を高め、各国の人々の間に知識と理解の懸け橋を築いて世界平和の大義を推進することを目指している。

超我の奉仕』

ロータリーの初期の時代に誰かがポール・ハリスに「このクラブの目的は何か」と尋ねたことがあった際、ポール・ハリスは一瞬考えていたが次のように答えたという。

「ロータリーの目的は、善意と友情が考えつく限りのあらゆる方法で、互いに助け合うことだ」と。

国際ロータリー・ニュース (1975年7月) には次のように書いてありました。

「ロータリーとは、友情、親睦、教育、奉仕、なかならず他人への思いやりと尊敬である。」

R. I. 事務総長書翰 (1977年3月) には次のように書いてありました。

「ロータリーとは何か？」

1. ロータリーとは、「超我の奉仕」を信ずる人達の親睦の集りである。
2. ロータリーとは、あらゆる事業や専門職業における職業道徳の水準を向上させる道である。

3. ロータリーとは、人々の最も貴重な財産である時間を、他の人達のために進んで割愛する人達の親睦の場である。
4. ロータリーとは、各自の職業を通じて奉仕することである。
5. ロータリーとは、一つの生き方として自から献身することである。

「ロータリー精神とは何か？」

前原勝樹P. G. 曰く (ロータリーの友：VOL. 21 No12)「ロータリー精神とは何か？それは一人一人の心の問題である。誰の心の中にでもある「温かい心」その「温かい心」を發掘し、その温かさ即ち善意を高揚し、これを具体化して他人に奉仕することによって、温かい人間関係を創ってゆく。これがロータリー精神である。

即ちロータリー運動は、個人個人が対象であり、個人の啓発である」と。

さて、ロータリーの綱領には「……奉仕の理想を鼓吹し……」とありますが、この「奉仕の理想」というのは一体何を意味しているのでしょうか。「人たる者は、自分自身の望んでいる幸せを、他人のために、求めてやらなければならない」仏陀はこのように申しております。ナザレのキリストは「人々が己のためにしてしかるべきと思うこ

と全てを、人々のためにせよ」と教えております。ロータリーはこの点を次のように定義しているのです。

「他人への思いやりが奉仕の基盤であり、他人を助けることはその表現である」と。

この理想は「超我の奉仕」「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」というロータリーの標語に表現されているでしょう。

これこそロータリーの各種計画と活動の根本にある理想だと考えます。

ロータリアンは、この理念を人生における幸せと、成功の真の基盤として受入れているのではないのでしょうか。」

以上は昭和52年9月、時の西田ガバナーからの質問「ロータリーとは何でしょうか」に対する私の回答文であった。

ロータリーの目的

ロータリーの目的は、生活の質を向上させ、地域を改善し、職業道徳の水準を高め、世界平和の増進をはかるにある。(R. I. 事務総長書翰：1980・7・15)

ロータリーと呼ぶものは一体何なのでしょうか

家庭の中では思いやり；

仕事の世界では正直；
社会では親切；
競技の世界では公正；
クラブでは協調と親睦；
地域社会では奉仕；
国際関係の面では同情ある理解と善意；
となるのがロータリーです。

成功者に対しては敬意となり；
不幸な人に対しては慈愛となり；
弱者には助力となり；
罪を悔いる人には寛容を意味し；
神に対しては崇敬と愛を意味するのが
ロータリーです。

(R. I. 事務総長書翰：1976・8・3)

思いやりと、手助けをするために、知己を求め、奉仕の機会を求めている

ロータリーでは、誰に対しても、所時、事情を問わず、他人に対する思いやりと、手助けの精神を実践するために、知己を求め、奉仕の機会を求めているのであります。(R. I. 会長代理ジョージ・ミーンズ講演の中から抜粋)

ロータリーの精神にはただ2つの基本的なアイデアがあるのみである。それは親睦と奉仕である。

1927年ベルギーのオステンドにおける国際大会で、レイモンド・クノーベルは次のように講演した。：

「ロータリー精神には、ただこの2つの基本的なアイデアがあるのみである。この2つの要素からロータリー思想のすべてが展開し、ロータリーでのあらゆる理想が生まれ、そして、ロータリー活動のすべてが発生してくるのである。

しかし、この基本的な要素は絶えず、より広い知識と一層熱烈な人類愛を加えていく必要がある。何故ならば、親睦と奉仕が知識に導かれ、友愛に見守られて活動する時、この2つの要素は、現にわれわれがそれに向って躍進している「人間性のめざめ」へとわれわれを真実に導いてくれるからである」(R. I. 事務総長書翰：1977・5・2)

「註」これは今から54年前のことである。

奉仕と親睦

南アフリカのイースト・ロンドンR. C. の会報に「奉仕と親睦」の関係論じた記事が記載されているとのことである。(文献摘録)

「私達は偶然にロータリアンになったものではありません。誰かが私達の行動並びに性格を、他の人達のために喜んで奉仕する職業人のグループに迎え入れるのに相応しいものであると評価して下さったからこそ、ロータリアンになっているのであります。

故に、真のロータリアンは、奇特な

人、それも他の人々よりも優れているというのではなく、人々のために活かして使える特殊な才能を身につけている人という意味での奇特な人なのです。

この特殊な才能を最も有効に活かしていくためには、ロータリアンは常に、私達がロータリー精神という言葉で呼称する原動力を注入し続けることを要します。

このロータリー精神を類推するのに、私が最も適していると思うのは、電力を貯蔵し、その支給源となる自動車のバッテリーです。バッテリーから流れ出る電力は、常に注意して充電しない限り、だんだん弱くなってきます。自動車の場合、エンジンにとり付けられているダイナモがこの役を果します。

ロータリアンの奉仕精神も、活動を続けていくうち次第に消耗します。

ロータリーにおけるダイナモは親睦です。毎週例会における楽しい朋友としての友情だけでなく、同じような思いやりの心をもった者同志が集って奉仕活動を計画し、実行するところのみ生まれ得る一種独特な親睦のことです。それが各ロータリアンの活動を強化させるものです。

もし、あなたが少々ロータリー精神の弛緩を感じておられるのならば、他のクラブ会員との親睦にひたり、ロータリーを肌で感ずることによって、その精神を回復できるのだということを

覚えていて下さい」

親睦と奉仕

親睦はR. C. の目的であることには違いない。従って会員相互の友情の強化も亦R. C. の目的である。しかし、R. C. には、その親睦と友情を達成する過程において奉仕の理想を追求するという重要な要素が入ってくることを忘れてはならない。奉仕の理想を追求するための会員相互の親睦と友情の強化であり、同時に、強化された親睦と友情は更に強化された奉仕の理想の追求に通ずるということになり、このようにして、事態は「友情親睦—奉仕の理想の追求—友情親睦—奉仕の理想の追求」という自転作用を営むのがR. C. の理論的実体なのである。(小堀憲助著「ロータリー・クラブ」128頁)

友愛と奉仕

私達人間は、友達なしでは生きてゆくことはできません。ロータリーは、私達に信頼できる友、私達を幸せにしてくれる友、私達が誇りにすることができる友達を与えてくれます。

私達は又、友達としてつき合う囲りの人々によって感化されます。立派な人達とつき合うことは、私達の人格を洗練することになります。そして丁度見習工がその仕事に熟達することによって、立派な一人前の技師となるよう

に、ロータリアンも、ロータリー活動に献身することによって、立派なロータリアンになることができるのです。

ロータリー活動、すなわち、ロータリー奉仕は、真に心が通い、力となる友情あってこそ達成できるのであります。(R. I. 事務総長書翰：1976・8・3)

ロータリーの精神

ロータリーの力は、ロータリアン一人一人が、他人のために尽すという奉仕の理想に自らを献げることから生れてくるのであります。他人のために奉仕することがロータリーの土台であり、その根本精神すなわち、奉仕の規範に従って行動する意志をもって献身することこそ全ロータリアンの目標でなければなりません。(R. I. 事務総長書翰：1974・8・1)

ロータリー精神

ロータリーの力は、ロータリアンの一人一人が、他人のために尽すという奉仕の理想に自らを献げることから生まれてくるのであります。これがロータリーの精神であります。もし、すべてのロータリアンが、一人残らず至る所で、ロータリーの精神のために、一層身を捧げ、善いこと、正しいことを守

るために尽すことを誓い、よりよい世界を造るために、自分にできる限りのことを、まず、自ら先んじて実行するならば、ロータリーは末長く世界にいまだかつてなかったほどの強大な勢力の一つとなるのであります。私はこれを心から確信しています。(1974~75年度 R. I. 会長ウイリアム R・ロビンス)

ロータリー精神

デトロイト R. C. 会員
エドカー・A・ゲスト 作

振舞いに紅バラの如き理想あり、
また手をとる掌に温情と真実を伝う、
心は奉仕に炎え、また力は行動に満ち、
笑いに正直の響あり、仕事に正直の歎
びあり、
後に来る者に豊かな大地を残す、
これぞすべてロータリーの望むところ
人に奉仕すべき真摯な一念。

自己のため求めることを差し控え、
他人のために求めることにはげむ、
自己の言動にやさしく、筆をとりては
温かく、
正しき道をふみはずすこと少なく、
奉仕を求めて財力を求めず、
隣人といさかうことなく、友人を
裏切らず、

これぞすべてロータリーの世界、
ロータリーの望むところもここにあり。

他者への道を円滑にし、
人生の価値を最高に高からしめ、
「同胞よ」なる言葉に真実味がこもり、
賞讃の言葉を発すべきときは真摯な
努力をほめたたえ、
友の姿が立ち去るまで温かき言葉を
やめず、
これぞロータリーの精神、
これぞロータリーの夢、
神よ願くは、この世を去るときの
到るまでに
わが心、神の御心に近づかむことを。

(ロータリー通解：ガイ・ガンデ)
イカー著 小堀憲助訳 P 45

善意の精神

この変化の激しい世界には、いろいろ異なる文化思想型態が存在します。

故に、他の地域社会を理解し、あるいは、提携して活動するためには、私達一人一人が、各自の人間社会に対する考え方を取り止め、知識の眼を開き、他の人々に対する思いやりの心を培うことが必要です。

ロータリアンは、他の人々への理解と奉仕につとめるというロータリアンとしての公約を誇りにしています。

事実、ロータリーの活動力と生存能

力は、全世界のロータリアンの言語、文化、宗教の相違を克服し、助けの手を差し延べる意志と熱意に依存するのです。この善意の精神があつてこそ、真の奉仕ができるのです。

(R. I. 事務総長書翰：1977・8・1)

ロータリーの理念

許しあう心、かばいあう心、
自分が蒙るもろもろの恩恵に心から感謝し、その感謝の心を、他人の幸福のためにお返しする。いわゆるおがみあいの世界であること。口先だけの奉仕、親睦であつてはならない。

(齊木亀治郎：「信天翁つぶやく」
230頁)

ロータリーは大海のようなもの

インバツサイ・デ・メロ R. I. 会長は1975年11月5日東京 R. C. 例会において次のように講演した。

ポール・ハリスは、多くの人から「ロータリーとは一体何であろうか？創始者として定義してほしい」と聞かれましたが、これに対し、明確に、具体的に「自分のロータリー観はこうだ」ということは言いませんでした。ただ、ポール・ハリスは：

「ロータリーは大海のようなものだ。大きき波が沢山あるが、その海

底にあるものものはグッド・ウィルである。友愛の精神、友好の精神がその底にあるのだ』と言いました。

海に囲まれている日本の皆さんは、海が深く、そして、底が静かであるということをよくご存じです。その善意の底から、荒れている波にいろいろなメッセージが上ってきます。私どもはロータリーの精神をもって、よりよき世界にするために、手を取り合って、夢をもって、大きな海に、これから出て行きたいと思えます。

ロータリーは単なる昼食クラブではない

ロータリーは単なる楽しい親睦のための社交クラブではないのであります。ロータリーは慈善団体以上のものであります。

ロータリーは生活の道であり、心構えであり、精神の在り方であるのであります。それは実業界における新しき声であり、近代社会を一層正しく、美しく、そして慈悲深く、より人間的な基盤の上に造りなおすように、社会の代表の人々に訴える世界的な声なのであります。(1962～63年度R.I.会長ニチシュC・ラハリー)

初めの頃ポール・ハリスが抱いたロータリーの将来についての見解

ロータリーの創立者ポール・ハリスは、初めの頃ロータリーの将来について彼の見解を次のように述べた：

「ロータリーの将来は神秘的未知に包まれている。ロータリーに行く先を広げ、切り開くために活躍できるのは、新しいロータリアンの朋友諸君である。ロータリーがわれわれにとって、更には全人類にとって、何を意味するのかは、ロータリアンが実際に行う活動の成果によって、世に知られていくであろう。」

その後彼はロータリーの偉力を次のように表現した：

「偉大な大河といえども、それは畢竟、溪谷や山腹をつたい流れ出る何百何千にも及ぶ細流や小川が、大河の流れに加わるべく、細波を奏でながら、山を下だり合流したその総合力に過ぎない。それはロータリーの成長にも似通っている。ロータリーが偉大な運動に発展したのは、多くの国々の何千にも及ぶロータリアン達が、私利私慾を捨てて、ロータリー活動に合流し活躍するからである。」

その後、ロータリー奉仕は年々伸展し、活動を続けてきた。しかしながら、今尚ロータリアンが個人として、あるいは、全世界の会員として、力を合せて、ロータリーの将来を切り開くために為

すべきことは山程残っている。この挑戦に應えることこそ全ロータリアンに課せられた重大な使命なのである。(R.I. 事務総長書翰：1978・12・10)

ロータリーの進歩について

ポール・ハリスは1947年2月号のロータリアン誌に次の通り寄稿した。これは、彼が全世界のロータリアンに送った最後のことばである。

ロータリアンはしばしば私に「ロータリーを創立なさった時、こんなに盛んなものになるだろうとお考えになりましたか」と聞く。「いいえ、1905年には私は6,000のクラブ30万人の会員を擁する全世界的な運動などとは予見だにしていませんでした」と答える。早春の頃、あまり大きくなりそうもない若木を植える時、人はいつの日にかそこに巨大な大木が育つであろうなどどうして確信できようか。それには、雨と太陽一神の攝理の微笑にまたなければならぬことではないか。若芽がはじめて生え出でるのを見る時、ああその時こそ人は大いなる木蔭を夢見始めることができるのである。(ロータリーの友：VOL. 27 No 2)

ロータリーの最終目的

ロータリーの最終目的は、最大のクラブ数を獲得することでも、人数を増すだけの目的で最大の会員数を狙うのでも、あるいは又、国際ロータリーが提唱する計画を増大しようとするものでもありません。

ロータリーは、奉仕を日常の指針とすることによって結ばれた、善意と熱意と名声を持つ人々を友好の中に集結し、地元地域社会には善意を発揚し、国際理解を増進することを最終目的とするものであります。(R.I. 会長代理ジョージ・ミーンズ講演の中から抜粋)

ロータリーは基本的には一つの人生哲学である

ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間につねに存在する矛盾を和らげようとするものである。

この哲学は奉仕—「超我の奉仕」—の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践倫理の原理に基くものである。(手続要覧1978年：45頁)

ロータリーとは

・
他人に対する思いやりと、

他人のためにつくすことである。

ロータリアンは、地域社会をより良くする努力を通して他人のために奉仕し、ビジネスと専門職業生活における道徳的水準を高め、各国の人々の間に知識と理解の懸け橋を築いて世界平和の大義を推進することを目指している。

「註」ロータリーの友：

VOL. 26 No 5 掲載

VOL. 26 No 6 掲載

VOL. 27 No 7 から

VOL. 28 No 7 まで掲載

ロータリーの目的

社会生活における人間の幸福は、他人への思いやりと助け合いにあるとするロータリーでは、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕の4部門を設け各自の職業を通じて「奉仕の理想」を推進することを目的としており、そのためには、

- 1) 広く知己を求めて奉仕の機会を持つ
- 2) 各自の職業に誇りをもってその道徳的基準を高める。
- 3) 公私の別なく奉仕の理想を実行する
- 4) 国際的にも理解と友情を広めかつ深める

という四つの道をひらき、

そして各自が

- ① 真実かどうか
- ② みんなに公平か
- ③ 好意と友情を深めるか
- ④ みんなのためになるかどうか

という四つのテストに照らして行動することが大切であります。

「註」ロータリーの友：

VOL. 16 No 1 から

VOL. 28 No 7 まで掲載

但 { VOL. 26 No 7 から
VOL. 27 No 6 まで欠

むすび

以上で大体「ロータリーとは何か」についての文献紹介のあらましを終了した。

要之、「ロータリー精神」というのは、ロータリアンの個人一人一人が、他人のために尽すという「奉仕の理想」—この理想に献身することである。

目には見えないが、人の心の奥底には「他人のために多少とも役立ちたい」という衝動がある。この衝動がロータリーの出発点である。そして又、ロータリーを今日まで育ててくれた生命でもあったのである。

さて、今日、われわれ自身の日常生活を振り返ってみるに、その生活は確かに豊かになっている。豊かにはなったが、その半面、温かい人情社会的連

帯感などは何時の間にか忘れられてきてはいないだろうか。物質的に豊かになった反面精神的にはむしろ貧しくなったのではないだろうか。

ロータリーにおいてもそうである。ロータリー組織の形態は実にすばらしく整備されたが、ロータリアン一人一人はむしろそれに酔うて、心の中に潜んでいる筈の「他人のために多少とも役立ちたい」という心の衝動はむしろ眠ったままではなからうか。「ロータリー精神」はより豊かに充実してきたであろうか。ロータリーらしい温い友情がロータリアンの全ての人の胸の中をより鮮かに流れ出したであろうか。更にその友情が、ロータリアン以外の人々に、職場に、地域社会に、世界の人々に広がっているであろうか。お互は今此処で、その点について大いに反省してみなければなるまい。今日、1月15日は「成人の日」である。「成人の日」は青春の自覚を新たにする日であろう。ロータリーも亦この1月はロータリー年度の後半期の出発点である。反省に最もふさわしい時期である。

ロータリーは一つの運動である。具体的行動である。実践活動であるのである。「奉仕する者は行動しなければ

ならない」これはロータリーの鉄則である。実践活動を止むればロータリーの運動はなくなり、ロータリーは次第に衰退する。

ところで、「奉仕」そのものは心の完全なる状態を必要とすることは勿論であるが、「心の状態」そのものだけを「奉仕」というのではない。自発的奉仕は行動の自由を意味しているのである。

他人に奉仕するというロータリー精神—その根底にある「多少ともお役に立ちたいという本能的衝動」は一体何によるのだろうか。

人間とは「人之間」と書く。人間は正しく人と人との間柄である。人があってはじめて自分が存在するのである。相助け合うところに人生の意義がある。他人に対する思いやりと手助けの心をもって、自分のクラブ、自分の職場、自分の地域社会並びに国際間の人々に、心の奥底にひそむこの「奉仕の衝動」、この「奉仕の精神」—「奉仕の理想」を注ぎ込み、皆んなと共に「生きる喜び」を分かち合い、生き甲斐のあるこの世を心豊かに楽しく過すことを念願してこの稿を終ることとする。